

水の源

2012.11
19

M I Z U N O M I N A M O T O

巻頭インタビュー 水源の里へ思いを馳せる

里山が舞台

写真家 今森光彦さん



ウォークルポ まちのキャッチフレーズは
「ないものはない」 島根県海士町

特集 全国水源の里フォトコンテスト

水源の里発 おすすめご当地グルメ
三重県津市「津ぎょうざ」
北海道下川町「雪ふりプリン」

全国水源の里シンポジウムを開催
岐阜県白川町

水源の里へ 思いを馳せる

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」。
「水源の里」の理念は、双方の地域に住む人たちが
お互いの暮らしや環境への理解や感謝が通い合っ
てこそ実現します。

このコーナーでは、文化人・著名人に、
そうした「水源の里」にまつわるお話をうかがいます。

聞き手：『水の源』編集長 町井 且昌
今森光彦さんのアトリエ（滋賀県大津市）にて



大津の棚田（撮影：今森光彦）



椎茸のほだ木をとるために伐採され、幹だけが太くなったクヌギの古木。人が雑木林の世話をしている証し（撮影：今森光彦）



1954年、滋賀県大津市生まれ。写真技術と昆虫行動学を独学で学び、1980年よりフリーランスの写真家として活動を開始。以後、世界各地の熱帯雨林や砂漠、日本の里山をフィールドに撮影を続けている。入念な観察のもとに撮影する写真と自身による解説で構成される作品は多くの人々を魅了する。近年は、昆虫など自然の造形を鮮やかに切りとる切り紙作家としても注目を集めている。
産経児童出版文化賞、木村伊兵衛写真賞、土門拳賞など受賞歴多数。主な作品に『今森光彦 昆虫記』（福音館書店）、『里山物語』（新潮社）、『湖辺みずべ』（世界文化社）、『おじいちゃんは水のにおいがした』（偕成社）などがある。

「里山」は 人と自然が共存する空間

—— 今森さんの写真集『里山物語』が契機となって「里山」という言葉が世に広がったといわれています。写真集の中で「二次的な自然」と表現されていますね。

里山は、人に手を加えられて維持される二次的な自然です。ボクが写真家としてデビューした1980年頃は、人がまったく手をつけてない場所だけが自然だと言われていました。国際的にも、原生林が自然で田んぼや畑は自然じゃないと。ただ、実際にフィールドワークを試みたら、絶滅に瀕している生き物が雑木林や田んぼにたくさんいたんです。それで、人と自然が共存する空間を総称するような言葉が必要だと思っていました。

—— 「里山」と言うようになったきっかけは？

写真集を作る前、1992年に新潮社の雑誌『マザー・ネイチャーズ』の連載を始めることになりました。そこで調べたら、当時は学者もだれも「雑木林＝里山」と言っていた。ボクはもうちょっと広い範囲、人も住んでいるけれど生き物も生きられる場所の総体として「里山」を使いたいと思いました。兵庫県立人と自然の博物館名誉館長の河合雅雄さんの著書で「里山」がよく使われていたので、電話したら「使えや」と（笑）。

雑誌の連載初回で「里山とは人と自然が共存する日本古来の農業環境のことをいう」と大胆な定義をしました。連載は8年くらい続いて、大きな反響がありました。特にナチュラリストから共感の声が続々と届きまして、それはうれしかったですね。世間に「里山」が言葉としてパーッと広まったのはそのときからです。

—— アトリエの周りは雑木林ですね。

ほとんどがヒノキ林だったところを伐開して、クヌギとコナラの幼木を植えました。あとは、エノキやカラタチ。アゲハ蝶なん

里山が舞台

今森光彦さん

かがよく集まってきますよ。ミカン類や山椒なども多いです。鳥が集まってくるように。—— それがこんなに大きく。

26年経っていますから。子どもが食べたブドウの種から大きくなったり、鳥が運んできたり。鳥がフンと一緒に落とした種が根付くんです。雑木林はこうやって育っていくんだなあと感動しました。人が手を入れることで成り立っている雑木林と、自然の状態の森とのバランスも大切です。

—— 全国の水源の里には里山の環境が残っていますが、同時にその環境を維持する難しさも抱えています。今森さんはどのような思いから里山を再生しようと思われたのですか？

ここを作ったから再生されるとは思っていませんが……。ボクは以前、10年以上フィールドワークをしていました。そのとき、すごくたくさん生き物が集まる、生き物密度が高い場所に会って、自然と撮影したくなった。この雑木林はそこがモデルになっています。小さくていいから環境の多様性がある空間を作りたいかったんです。

—— お生まれは滋賀ですか？

ハイ、大津です。子どものころ周りは農家ばかりでしたが、ボクの父はサラリーマンでした。だから農業に憧れていた。今、里山を撮っているのはその影響が大きいですね。

—— 子どもの頃の記憶が今につながっている。

小さいころから人の気配のある自然のなかで遊んで育ちました。今でも熊がいるような原生林はイメージできないですね。

—— 写真集を拝見しますと、里山の風景と昆虫が主体で人物が写っている作品は少ないですね。写っていないけれど人が暮らしている気配を感じます。

人が前面に出ると、どうしても目がいつてメッセージが伝わりにくいと思います。生き物が住んでいる中に人が住んでいる、そんな自然と人が共存している空間を感じてほしい。

昆虫採集をムーブメントに。小さな命から学ぶ。

—— 海外へもしばしば足を運ばれていますね。

世界各地の熱帯雨林を見て歩き、外から日本の自然環境を見るようになりました。そうすると、里山の価値を見出すようになって、ありきたりのように外国にはない、日本独特の共存空間だと気づいたんです。

—— 国内では写真家としてだけでなく、さまざまな活動をされていますね。

宮崎で「むしむし合宿」、滋賀のマキノ高原で「昆虫教室」や「昆虫キャンプ」など、親子で昆虫や自然と触れ合うイベントをやっています。こういったことを始めたきっかけは、昆虫採集や標本づくりをすると、学校の先生やお母さんたちがすぐに「かわいそう」「採っちゃいけない」と言って子どもたちを遠ざけてしまっているからです。そうすると、子どもたちは怯えて、怖がってしまいます。そうじゃないってことをしっかり教えたいと思いました。小さな命から命を学ぶ、まさにボクもそうでした。

日本は生き物が好きな子どもがすごく多い。これは誇りをもっていいと思います。スキンシップをとる行為が必要なんです。合宿で昆虫を好きな子どもたちの親と話をし、今の状況が分かっただけで勉強になった。子どもたちが自然や昆虫と触れ合う橋渡しをもっとやらないといけない、これをムーブメントにしたいと思いました。

—— 合宿ではどのようなことを教えるのですか？

生き物がなぜ雑木林で生きていけるのかを学びます。ただ、ボクはツベコベ教えません。観察会へ行くと、指導者が教え過ぎている場面を良く目にします。大人が教え過ぎると、子どもは聞いているだけになってしまう。あれは絶対にイヤですね。自分が子どものときを思い出すと、いい環境の場所に連

れて行ってもらっただけでした。自分の目で発見するから面白いんです。今はその環境が少ないので、ボクは子どもたちに環境を与えています。

—— 子どもたちは学校とは違った学び方をするんでしょうね。

「学校では教えてもらえないこと」を大切にしています。生態とか名前を調べるのはあとでいいんです。3日間、環境の中に身を浸して、五感で感じ取る。それが最初は意外にできないんですよ。ボクもついつい教えちゃうことがあります。

昆虫採集は日本の子どもの文化です。文化だから守らなければならないと思ってほしい。もっといろんなことを知りたくて、九州大学の発達心理学の先生に研究してもらっています。推理力や環境を把握する力、運動神経など、いろんな要素が関わっている。まだ途中ですが、予想もしなかったことが分かりかけています。きちんと学術的に示して市民権を得たいです。

昆虫採集は必ず命の問題にぶつかります。「何で命を殺しているんですか？」とお母さんたちは必ず聞いてきます。「蝶々も人も同じ生き物なのに、何でこっちはよくて、こっちはダメなの？」って。ボクは大した理論武装をしていないけど、食物連鎖の話とか自分なりに説明します。十分に説得できているとは思わないのですが、10年やってきて、ある程度理解が得られるようになってきたと思っています。虫採り合宿ではカブトムシを採集するのですが、カブトムシがどこで暮らしているかが分からないと捕まえられる。昆虫採集することで林や森へとつながっていく。デパートで買うとカブトムシだけ。野生の状態で見せると目からウロコです。それこそが学校では得られない学習体験なんです。



昆虫教室の様子



ミヤマクワガタ (撮影:今森光彦)



アトリエの近くにある古い田んぼ。人力で作られた畦道や農具小屋から農家の人の息づかいが聞こえてくるような風景 (撮影:今森光彦)



今森さんのアトリエ。敷地内には雑木林が広がっている

里山に暮らし、里山の魅力を伝えていく。

—— 獣害が問題になっていますが、このあたりに動物は出ますか？

ちょっと山から離れているのでサルはいませんが、あとは皆いますよ (笑)。イノシシには毎日出会っています。夜に通るとイノシシが子どもを連れて歩いている。昔は車が来るとパーッと田んぼに逃げましたが、今は電柵があって逃げられないんです。人間と同じ道をトコトコと歩いて行きます。それを見るときかわいそうだと思いますね。ボクのところは電柵をつけていないので、周りは獣道だらけです。イモやユリ根なんかは植えたらずぐ食べられてしまいます。どれもこれも森が悪くなってきたのが原因です。

—— 森が悪くなってきたというのは？

もともと動物が住んでいた森が荒れている。昔の山の地図を見ると、ホトラというハゲ地が点在していたことが分かります。ワラビをはじめいろんな山菜を採るために木を伐採した場所です。そこは同時にシカやノウサギの餌場でもありました。だから動物たちは、わざわざ危険を冒してまで里に下りて来る必要がなかったんです。そのホトラがだんだん放置されたり、植林されたりしたことで、全部が森になった。それで動物たちはなんの抵抗もなく人里に下りてくることになったとボクは考えています。

—— 森の手入れが必要なんですね。

自然と共存できる環境は、人が整備をして作っていかなければならない。ボクは子どもたちに、どうしてサルやシカが人里まで下りてくるようになったのか？ どうしてカブトムシは雑木林に暮らしているのか？ そういった自然本来の関係性を見抜けるようになってほしいと思います。里山はボクにとってはもちろん自然環境にとっても大切な場所です。写真も昆虫教室も里山への想いが土台となっています。次の世代に正しい自然の姿を引き継げるようにこれからも取り組んでいきたいと思っています。

インタビューを終えて

アトリエは雑木林の奥深くにありました。緩やかな斜面の、背後はヒノキの森とその向こうに比叡山と比良山の山容、前面は草の生い茂った畑が続いています。お話を聞いたあと、畑に出てハーブの話、それに群がる蝶の話、夏が終わると始まる農作業のことなどを伺いました。

Close-up 今森光彦さんの書籍

『世界のふしぎな虫・おもしろい虫』

アリス館 (3,990円)

世界中からフォルムが不思議な虫や行動パターンがおもしろい虫を、今森さんの美しい写真とあたたかい文章で紹介。実物大の写真が241点掲載されている楽しい昆虫図鑑。



『魔法のはさみ 今森光彦の切り紙美術館』

クレヴィス (1,890円)

今森さんは切り紙作家としても有名。精巧でありながら愛嬌のある姿に切り取られた動物や植物、鳥、昆虫たちが登場する切り紙の作品集。



豊かな自然の中で営まれる「水源の里」の暮らし。そこには、都会には無い魅力があふれています。その一方で、都市部では想像もできない厳しい現実や苦勞があります。このコーナーでは、そうした「水源の里」ならではの課題や活性化への取り組みにスポットを当ててレポートします。

まちのキャッチフレーズは「ないものはない」

あま 島根県隠岐郡海士町

職員の熱意に1ターンの決意

海士町在住、阿部裕志さん34歳。彼こそが島おこしの仕掛け人で株式会社巡の環の代表取締役。いまや全国から講演依頼もひっきりなしという。

京都大学大学院を修了後、トヨタ自動車に入社。と聞けば、順風満帆な人生をどうして？ と思ってしまうのだが…。

彼のなかではイレギュラーでも偶然でもない。しっかりとした人生設計に基づいた予定通りの舵切りだったのだ。

「いずれは、ペンションの親父になって、若い客に人生を説くのが夢だった(笑)」という彼は、エンジニアとして新車生産の最前線でライン管理を担当していた。しかし、大量生産、大量消費の現代社会のあり方に疑問を持ち始める。同時に子どものころから「いつかは」と念じてきたアウトドア生活への希望も膨らみ始める。

そんな折、1ターンした友人を訪ね海士町に。そこで出会った町長や町の職員の半端でない熱意が、彼の転身を後押しした。町長は給料の半分を、課長

も3割を自主的に削る。言うは易しだが、半分カットは壮絶だ。「身を削る」とは正にこのこと。そうした血の滲む努力で捻出した「お金」を島の再生に投入する。その真剣で一生涯懸命な姿を目の当たりにした。

町議や職員、町民が囲炉裏を囲んで一晩中、島の未来を真剣に語り合う。提案されたアイデアは即座に実行される。「島再生の政策形成のプロセスに触れ、自分もこの輪の中に入りたい」と願ったことが海士町民、阿部裕志誕生の経緯だ。

トヨタの経験がいまを支える

世界に誇るトヨタの最先端製造ラインの管理と巡の環での活動。劇的な仕事の変化を問うと意外にもこんな返事が…。

「トヨタでも、海士町でも直接生産に携わらない立場のボクが、最前線の人を想像し効率化や時間短縮、コスト削減をイメージしながらラインを作り上げる。その意味で、仕事の違いは感じないし、何よりトヨタでの経験が役に立っている」と。

海士町に1ターン。巡の環を立ち上げてもうすぐ5年。確かな手ごたえを感じるとともに、第2段階に差し掛かったと認識もしている。

巡の環は、地域に根ざす、地域から学ぶ、地域を伝える一を軸に3つの事業を展開している。

一つ目は、根ざすための地域づくり事業。これは、頼まれた仕事は何でもやるというもの。例えば、町の



海士五感塾にて
左：漁業体験
下：体験した内容をワーク
ショップで話し合う



イベントや子どもを対象にした自然体験事業の企画・運営。時には民宿の皿洗い、スナックの手伝いも。雑多かつ実に幅広い。

次に、地域に学ぶ教育事業。これは、阿部さんが最も力をいれ将来会社の中心に据えたいと考えている事業。「海士五感塾」に代表される教育・研修のプログラムだ。対象は、企業人や自治体職員。島の生活や伝統文化に触れ、感性を磨くというもの。巡の環の仕事に携わることで、地域おこしのリーダーに成長。東北で起業した青年もいる。

最後が、地域を伝えるメディア事業。これはインターネットを介した物産の販売。商品は、岩ガキ、隠岐牛から冊子やCDまでとこれまた幅が広い。

当初は厳しかった経営面もいまは、ある程度目途が立った。6年目の飛躍を狙っている。

「暮らし」と「仕事」と「稼ぎ」

彼曰く。島に来て強く感じたのは時間の違い。都会や企業は、目標も近いスピードも速い。島には、後鳥羽上皇が暮らした800年前の文化や行事が今も残っている。圧倒的に時間軸に違いがあると。

島の人々は、魚を獲る優れた技術や作物を育てる高い知識を持っている。しかし、売る術を持たない。ボクたちは、技術も知識もないけれど売る術を考えることができる。町のポスター「ないものはない」のコピーが蘇る。

またこんな話も。彼が海士町に来た1年目にアメリカガイユニバーシティで生き方について考える機会があった。自分の能力を発揮する場所があること。その能力を活かし地域や人々が豊かになること。人々の幸せな姿を目にすること。それこそが幸せな生き方だと気づいた。それは海士町での暮らしそのもの。既に「幸せな生き方」を手に入れていると気づいた瞬間だった。

さらにもうひとつ。「暮らし」と「仕事」と「稼ぎ」のこと。暮らしは生きる力。仕事は人間として課せられた責務。稼ぎは対価。都会では、暮らしと仕事と稼ぎは、距離を保って別々の場所に存在する。



(株) 巡の環を運営するスタッフと
代表取締役を務める阿部裕志さん(右から2人目)

トヨタ時代は、稼ぎ一辺倒だったと振り返る。ところが、海士町に来て3者の距離がすごく接近したと感している。暮らしと仕事と稼ぎのバランスがとれてくると生き方から表や裏、損得がなくなる。つまり、常に自然体でいることができ自分も、周り（他人・会社・地域）も、すごく心地がいいと感じれるようになったというのだ。

付加価値こそが武器

「天は二物を与えず」との格言がある。しかし、取材をした阿部さんは「知（高い教養と広い見識）・徳（信頼され尊敬を得られる人格）・体（考えたことを実行する力）」を兼ね備えた人物だった。神様もずるいものだ。そんな彼なのに「これ美味いんで

すよ」と定食のアジフライを記者の皿に差し出してくれる人懐っこさもある。食べ物を恵んでくれたからではなく、なんだか理屈抜きで応援したくなる。

海士町の1ターン者は300人を越えている。だが、数字以上に評価されるべきなのは、その質の高さだ。取材した阿部さん然り。若手の一流講師を招いて開催するAMAワゴンの講師に島が招いた岩本悠さん然りだ。

かつて、地域は経済と雇用で賑わうと言われた。だが今後は、これらに加えて「付加価値」という要素が不可欠だ。

豊かな海の恵のほかに、人材力、教育力、発信力という新たな武器を手に入れた海士町から今後目も離せない。 【取材・文:永井 晃】



■取材を終えて
いま島が揺れている。竹島や尖閣諸島の領有権を巡り、隣国韓国・中国と我が国の関係は、氷点下の冷え込みだ。外交や歴史問題を述べる気は、さらさらしない。ただ今回の「島」問題を見るとき、高度経済成長期に置き去りにされた中山間集落の姿にオーバーラップしてならない。島根県に入ったとたん「竹島は日本の領土」と書かれた看板やポスターを数多く目にした。県民にとって、それだけ竹島問題は身近で重要という認識の表れだ。では、筆者を含む国民の多くの認識はどうだったか？ 政治からもマスコミからも注目されず、意識の外に追いやられていった大切な「島」。それこそ中山間集落と同じではないかと。今こそ、集落の現状と将来を国民の多くが自らの問題として真剣に考えなければいけない時なのだと思う。

海士町はこんなまち



海士町取材が決まりインターネットで予約した「あざ美」が偶然にも海士町長さんの家族が営まれる民宿だったこと。その民宿にたまたま宿泊されていた静岡県小山町の町長さん一行とお話させていただく機会を得たことなど、素敵な出会いに恵まれた実りある旅だった。

島が消える…？ 生き残りの戦略

昭和25年当時、7,000人を数えた海士町の人口は、約3分の1まで減少。40%に迫る高齢化が深刻さに追い討ちをかける。このままでは島が消える。平成14年に就任した山内道雄町長は、島の生き残りをかけた再生戦略を断行する。まずは、行財政改革。町長50%、職員30%の給与カットでラスパイは全国最低の72%に。削減効果は2億円。これらの取り組みで、財政事情は確実に改善に向かっていく。この体力を攻めの施策に充当。「ないものはない」からこそ、あるものを活用して産業を創出。雇用を確保し、外貨を獲得する。その第1弾がサザエカレー。第2弾はいわがき養殖。さらには、細胞組

織を壊すことなく凍結するCAS技術の導入による海産物の商品化、隠岐牛のブランド化、海士乃塩の開発など、続々と産業を生み、1ターン者の確保と雇用の創出に努めた。これらの取り組みは、総務大臣表彰（平成19年）や全国町村会長表彰（平成20年）、農商工連携88選への認定（同年）など、高い評価を得て、海士町を全国区へと押し上げていった。しかし、数々の名誉よりも、島民の多くが自信と誇りを取り戻しつつあることこそが、最大の成果なのだ。

島前唯一の高校を残せ

海士町には、島前3町村で唯一の「島根県立隠岐島前高校」がある。過疎化や少子化の影響で平成9年に77人いた入学者が、平成20年には28人に激減。統廃合の危機が迫っていた。

島から高校が消えると中学を卒業した子どもたちは、島外に出ざるを得なくなる。同時に仕送りなどで親の金銭的な負担は拡大。高校入学を契機に家族揃って島を出るというケースすらあったという。

つまり、高校が消えると島の自立や存続に赤信号が灯るのだ。そこで取り組んだのが「島前高校魅力化プロジェクト」だった。将来の島を担う人材育成を目的に「地域創造コース」を設置。また島の高校から国公立や有名私立大学に進める学力向上の取り組み、さらには、全国から意欲のある生徒を募集する「島留学」の実施など、町が財源投入して高校の魅力化を推進した。

この結果、平成24年は2学級59人に生徒数が回復。学力面でも、平成22年度卒業生の約3割が国公立大学に合格。加えて、生徒が考案した観光プランが文部科学大臣賞を受賞するなど、目覚ましいスピードで大きな成果を上げ続けている。

後鳥羽法皇ゆかりの島

平安朝（8世紀から12世紀）の時代に隠岐は「流人の島」に指定された。海士町には後鳥羽法皇の島流しの記録が残る。

配流の原因は承久の乱。朝廷の権威回復を目的に承久3年（1221年）後鳥羽上皇が、時の執権北条義時を討討すべく挙兵した。これに応じた畿内や近国の兵が戦いを挑んだが、鎌倉幕府19万の大軍に完敗。幕府は朝廷や法皇軍の指導者を次々と処罰。後鳥羽上皇は流刑を免れるため出家して法皇となったが叶わなかった。

後鳥羽法皇は、中世屈指の歌人と謳われた。在島19年間に700首を詠んだといわれる。「我こそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け」の歌が有名。和歌に通じ還京の希望を持ち続けながら19年間の配流生活の後、延応元年（1240年）60歳で崩御。遺骨の大部分は現在の御火葬塚（写真）に納められた。



全国水源の里フォトコンテスト

水源の里の生活や文化、四季折々の表情など、日本の原風景を写真に収めていただく全国水源の里フォトコンテスト。第4回目を迎えた今年は493点の応募がありました。厳正な審査のうえ、グランプリ1点、優秀賞3点、特選20点を決定。11月2日に岐阜県白川町で開催した第6回全国水源の里シンポジウムで表彰を行いました。

審査員 ● 審査委員長 井上 隆雄 ● 特別審査員 田沼 武能 井上 博道 (敬称略)

グランプリ

『洞窟の氷筍』 群馬県みなかみ町

角田 行雄さん(群馬県みなかみ町)



受賞コメント

撮影した大幽の洞窟までは、写真クラブの仲間と近くのスキー場まで車で行き、その後はカンジキを履いて1時間30分くらい歩きました。とても暗い洞窟のなかでさまざまな方法を試し、氷にブルーの色と透明感、岩の上の苔の色も出た満足のいく写真が撮れました。雪中登山をして撮影した甲斐があり、貴重な作品ができました。

昨年のダイナミックなグランプリ作品とは対照的に、大地からしみ出す一滴一滴の雫が作る氷筍の美しさを捉えた幻想的な作品です。春になるとこの氷筍も溶け、利根川の水源になるそうです。氷の透明感、自然が作り出す造形の面白さを異次元的空間として表現しています。新しい感性で水源の里を表現したものと高く評価し、グランプリに決定しました。



総評

水に関わる伝統芸能や神事、水を主役に自然美を捉えたものなど、全国からすばらしい作品が届きました。水の美しさだけでなく水と人間のドラマを伝える甲乙つけがたい作品が増え、なによりも年々レベルが向上していることを嬉しく思います。カメラの進歩で誰もが失敗なく撮影できるようになりましたが、撮影者の感動が写し込まれていない写真からは何も伝わりません。人まねではなく、自分自身で発見したテーマが人に感動を伝えます。新しいテーマを発見するためによく歩き、よく観察し、全神経を集中して写真に挑戦してください。

田沼 武能 特別審査員



優秀賞・
総務大臣賞

『山里』

高知県大豊町

松木 宣博さん
(高知県南国市)

山里の女性の素敵な笑顔。見る人の心を豊かにしてくれるショットです。水槽で野菜を洗う情景から自然環境の豊かさが伝わってきます。水源の里に住む女性の姿を写した、生活感あふれる作品です。



優秀賞・農林水産大臣賞

『水の民の祭り』 島根県吉賀町

吉崎 佳慶さん(島根県益田市)

前夜から待って確保したカメラポジションで撮影したというだけあって、アングルもシャッターチャンスもパーフェクトな作品です。飛び散る飛沫の流れ具合が躍動感を演出しており、水源の里のすばらしい行事をいかに表現しています。

優秀賞・国土交通大臣賞

『八畝の曙』 高知県大豊町

竹村 悦子さん(高知県高知市)

水田の写真はたくさん応募されていますが、朝日で早苗田が茜色に染まる光景を捉えた作品は希少です。田んぼの中にある祠は五穀豊穡をもたらすといわれる水神さまでしょうか。払暁の静寂な光景に、人間の営みを想像させる作品です。



水源の里
発

おすすめ
ぶ当地
グルメ



津ぎょうざ 1,470円
(生ぎょうざ・プレーン5個)

三重県津市

三重県の県庁所在地で県内最大の面積をもつ津市。交通アクセスに恵まれた中部圏と近畿圏の結節点で、「世界一短い地名」としても有名です。こちら自慢のご当地グルメが「津ぎょうざ」。

「津ぎょうざ」の定義は①直径15cmの皮を使用②揚げ餃子であることの2点。約30年前に学校給食として生まれ、1個で子どもたちのお腹を満たし、一度に沢山の数に火を通すため、揚げるという手法でメニュー化されたのが発祥だそう。この「大きな・揚げ餃子」が子どもたちに絶大な人気を博したため、4年前から広く一般でも味わえるよう製品化されました。今では、市内のいろんな飲食店で

食べられる他、全国からお取り寄せもできます。

大きい大きいとは聞いていましたが、実際に見てみると、やっぱり「大きいっ!」。手の平からはみ出るほどの餃子は1個100gもあり、一度見たら忘れられないインパクト。それを凍ったまま、150～160℃の低温の油で12～15分間じっくりと揚げます。

パチパチ弾ける油の音と香ばしい薫りに包まれながら、皮はこんがりきつね色に。五感が刺激され、食欲も最高潮です。揚げたてを一口……パリッ! ジュワ～!! カリカリの皮の中からジューシーな肉の旨みが溢れます。噛み進めると、皮はだんだんモチリとした食感に。ふっくらした餡は、ニラやニンニク、生姜などの風味豊かで、何もつけなくてもしっかりとした味があります。思わず「ウマいっ!」と声を上げるとともに、ビールを開けてしまいました(笑)。子どもはもとより、大人にも喜ばれる味。1個で食べごたえも満点です。

【取材・文：白波瀬聡美】



↑
津ぎょうざの製造元(株)まつぜんフードサービスの代表取締役で、「津ぎょうざ協会」の会長を務める北泰幸さん。



雪ふりプリン 280円

北海道下川町

下川町は、名寄川流域の肥沃な大地と、町の90%を占める豊かな森林資源に恵まれた農林業が盛んなまち。マイナス30℃にまで達する冬場には、真っ白い雪原が広がり、キラキラ輝きます。そんな北国の美しい情景を、小さなガラスの世界に表現したオリジナルスイーツ「雪ふりプリン」。地元牧場の絞りたて生乳を使った白いプリンです。

手がけるのは矢内菓子舗の矢内眞一さん。「地元の人に愛され、全国の人にも興味を持ってもらえる商品を作りたい」と、下川町ふるさと開発振興公社の協力のもと、北海道の牧場生乳にこだわった製品を考案。パッケージや「雪ふりプリン」のネーミングも「北海道の雪景色をイメージしながら食べて欲しい」という願いが込められています。

空から舞い落ちる雪を思わせるパッケージの中には、透明感のあるガラスの容器に入ったミルク色のプリン。食べる前から、期待が膨らみます。ワクワクしながらパカッとフタを開けると粉雪に包まれた雪玉が! 正体は、粉チョコのパウダーと生チョコのボール。愛らしい遊びゴコロに胸がキュンとなります。

スプーンの上でフルフル揺れるプリンを口に運ぶと、ふわりとほどけ、ミルクィで優しい甘さが広がります。クリーミーなコクがあるのに、しつこさはなく軽い口溶け。ほんのりコーヒー風味のマイルドビターなチョコボールと、チョコパウダーが味と食感のアクセントになり、生乳のまろやかさを引き立てます。作り手のセンスがキラリと光る、美味しくて夢のあるスイーツです。

【取材・文：白波瀬聡美】



↓
北海道の雪景色をイメージしたパッケージは、お土産にも喜ばれそう。地方発送も可能です。



↑
矢内菓子舗の皆さん。お客さんをハッピーにするお菓子を探求し、作り続けています。



【お問い合わせ】
矢内菓子舗
〒098-1207
北海道上川郡下川町
錦町81番地
TEL 01655-4-2113
FAX 01655-4-2167
営業時間 8:30～19:00
定休日 日曜

↑
ルーツの学校給食をイメージさせる可愛いパッケージの「ランドセルつぎょうざ(3個1,260円)」。松坂牛入りの「ジュワ旨(5個1,890円)」もあります。

【お問い合わせ】
津ぎょうざ協会
〒514-0015
三重県津市
寿町4番6号
(株式会社まつぜん
フードサービス)
TEL 059-226-4545
FAX 059-229-8006

第6回 全国水源の里シンポジウムを開催

「日本の宝 水源の里 ～日本の元気は水源の里から～」をテーマに

11月2・3の両日、岐阜県白川町で第6回全国水源の里シンポジウムを開催しました。自治体関係者や地域住民ら約600人が参加。基調講演、パネルディスカッション、現地視察などを通じて水源の里集落再生に向けた熱心な議論や意見が交わされました。このうち、基調講演と現地視察の様子を報告します。

2日
1日目

基調講演

「“水源の里”再生の課題」と題して、小田切徳美さん（明治大学農学部食料環境政策学科教授）が、基調講演を行いました。

はじめに農山村の空洞化は、人の空洞化（過疎化）、土地の空洞化（耕作放棄地の増加）、ムラの空洞化（集落機能の脆弱化）によって進行することを説明しました。そして、集落機能の脆弱化は、高齢化率だけでなく、非高齢者の数や集落の寄り合い回数を合わせてみる必要があると指摘。人口や寄り合いの回数が減ってくると、ある段階で急に集落に元気がなくなり、住民にあきらめムードが蔓延する。そうなる前に集落活性化のための対策を講じておく必要があると訴えました。

ムラの空洞化がおきる前の対策としては、女性や若者がいきいきと参加できる機会をつくること、地域に住み続けることの誇りを持つこと、お金が循環する新しい地域産業の構築の3点を挙げました。中でも、新しい地域産業の構築が最重点課題であり、地域資源保全型経済、第6次産業型経済、交流産業型経済、小さな経済の積み上げの4つの経済の提案がありました。

一方、ムラの空洞化を解消する方法として、あきらめている人をもう一度やる気にさせるために、人による支援が重要であること。加えて、多様な外部サポート人制度を活用することを奨励しました。最後に、「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」という水源の里の理念の普及・拡大の必要性を訴えて、講演を締めくくりました。



3日
2日目

現地視察

水源の里佐見コース、東濃松の里コース、ふるさとまつりコースに分かれて白川町内を視察。このうち、水源の里佐見コースで、(株)佐見とうふ豆の力の代表・田口妙子さんにお話を伺いました。

佐見地区では、平成19年に4つの集落営農組合を設立したことにより、大豆の作付面積が増加。この大豆を活用しようと、白川町は平成20年度に大豆加工施設「佐見とうふ豆の力」を整備。地域の女性農業グループが、豆腐や厚揚げなどの生産・販売に取り組んできました。平成22年には、この女性農業グループが母体となり、(株)佐見とうふ豆の力を設立。湯葉などの新たな商品を開発し、経営の規模拡大・安定化を目指しています。



(株)佐見とうふ豆の力代表・田口妙子さん

この会社は、40から60歳代までの女性8人で運営しています。早い時は午前4時ごろから作業し、1日に250～300丁の豆腐を作っています。小さい子どもや介護の必要なお年寄りを抱えている人もいますが、協力しあって存続していきたいです。

インフォメーション

全国水源の里連絡協議会第6期総会を開催 新体制で組織の拡大と活動の充実を図る

11月2日（金）、岐阜県白川町で全国水源の里連絡協議会第6期総会を開催しました。第5期事業と決算見込みを報告し、第6期事業計画と予算を決定しました。また、新会長に山崎善也綾部市長が就任し、新体制がスタートしました。



左：新会長・山崎善也綾部市長
右：前会長・西嶋佐伯市長

役員体制

会長	京都府綾部市	山崎 善也
副会長	福島県喜多方市 山梨県甲州市 岐阜県白川町 島根県邑南町 高知県大豊町 大分県佐伯市	山口 信也 田辺 篤 今井 良博 石橋 良治 岩崎 憲郎 西嶋 泰義
監事	北海道中川町 和歌山県田辺市	川口 精雄 真砂 充敏
顧問	初代会長	四方八洲男（敬称略）

事業計画

第6期は、163市町村とともに次の7項目を実施します。
①250市町村の参画を目標とし、組織の拡大を図る。
②第7回全国水源の里シンポジウムに協賛する。
③情報誌『水の源』を発行する。誌面の充実を図るとともに、購買者の拡大に努める。
④第5回全国水源の里フォトコンテストを実施する。
⑤協賛・募金活動を実施する。
⑥国に対して、水源の里の理念の普及と集落再生に向けた施策の展開を要望する。
⑦水源地域の森林の保全育成を目指し、森林環境税及び水源税の推進に努め、関係団体との連携を深める。

第7回全国水源の里シンポジウムは、 高知県大豊町で開催されます。

▲全国水源の里連絡協議会 事務局

綾部市役所 定住交流部 水源の里・地域振興課
(上林いきいきセンター)
〒623-1122 京都府綾部市八津合町上荒木5番地
TEL:0773-54-0095 FAX:0773-54-0096
E-mail: suigen@city.ayabe.lg.jp
http://www.suigenosato.com/index.htm

事務局は平成24年11月より綾部市に移行しました。

読者アンケート&プレゼント

『水の源』では、今後の誌面づくり充実のため、読者アンケートを実施しています。アンケートにお答えいただいた皆様のなかから、おすすめご当地グルメのコーナーで紹介しました「津ぎょうざ」か「雪ふりプリン」を各2名様にプレゼントします（賞品の指定はできません）。



はがきに、①面白かった記事、②今後取り上げてほしい内容、③水源の里への思いなど、あなたのご意見・ご感想、住所、氏名、電話番号、性別を明記の上、下記宛先『水の源19号』読者アンケート係までご応募ください。

【平成25年1月25日（金）消印有効】

※当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。
※ご応募いただいた皆様の個人情報は、賞品発送以外の目的では使用いたしません。

『水の源』定期購読者募集

本誌を定期購読していただける方を募集しています。

- 年間購読料：1,000円（年4回発行）
- お申し込み：下記連絡先、『水の源』定期購読係まで

お問い合わせ、ご連絡先は

上林いきいきセンター
〒623-1122
京都府綾部市八津合町上荒木5番地
TEL 0773-54-0095
FAX 0773-54-0096
E-mail: suigen@city.ayabe.lg.jp



『渓谷晩秋』
兵庫県香美町

藤原 昌平さん(大阪府高槻市)



『涼を求めて』
和歌山県田辺市

平山 弘さん(和歌山県田辺市)



『盆おどり』
島根県雲南市

藤江 松男さん(島根県出雲市)



『桜鱒滝に挑戦』
北海道清里町

大江 平次郎さん(北海道北見市)



『ホタルの乱舞』京都府綾部市

多田 實さん(京都府綾部市)



『足跡』福井県おおい町

知見 治さん(福井県おおい町)



『丹波市の秋色』兵庫県丹波市

渡辺 剛さん(京都府福知山市)



『雪煙舞う森』東京都檜原村

星野 郁男さん(山梨県上野原市)



『虫送り』三重県熊野市

岡田 治さん(和歌山県田辺市)



『棚田の代掻き』鹿児島県日置市

堂元 久志さん(鹿児島県霧島市)

水の源 第19号

企画・発行：▲全国水源の里連絡協議会

発行日：平成24年11月

編集：「水の源」編集委員会

私たちは
水源の里を
応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会・会長 玉川福利

全国農業協同組合連合会・代表理事理事長 成清一臣

全国森林組合連合会・代表理事会長 佐藤重芳

電気事業連合会・会長 八木 誠

独立行政法人 水資源機構・理事長 甲村謙友

社団法人 全国浄化槽団体連合会・会長 上山健治郎

一般社団法人 全国清涼飲料工業会・会長 菊地史朗

公益社団法人 大分県薬剤師会・会長 安東哲也 (敬称略)